



図 86歳、紅皮症化した膿疱性乾癬

「私の乾癬, 何歳になったら治るの？」

山中 恵一

三重大学医学部皮膚科教授

まず初めに画質の悪い写真をお詫びしたい。パート先の療養型病棟で紙カルテに貼っていたカラー写真をスキャンした代物である。臨床医としては患者さんやご家族、医療スタッフから次々と繰り出される質問に、いかに的確に回答するかが勝負である。しかもできるならば会話のあと、相手を笑顔にさせたい。まさに真剣勝負である。そのためには医師は引き出しが多くなければならないのである。言い方を変えると引き出しの数を増やすため勉強に勤しんだほうがよい。

患者さんからときどき「私の乾癬はいったい、何歳まで続くの？」という質問を受ける。写真は86歳の女性で、膿疱性乾癬と診断され25年間外用療法を受けてきたが軽快せず、ほぼ同じ内容の外用を処方されていた。近年は療養型病棟に入院のため、ほぼDo処方、しかも安価な外用処方を要求される。

生物学的製剤を開始したいのは山々であるが、社会的状況に応じてDo処方であった。ある日、2週間ぶりに往診に行くと、寝たきりでいつもの皮疹がほぼ消退していた、治療内容は不変であるのに、“strange”という気持ちであった。後日、この患者様は診察の4日後に亡くなったとうかがった。

もちろん乾癬は樹状細胞と好中球、IL-17産生細胞を中心とした免疫の過剰状態である。外界の微生物から人体を守るため、免疫機構は最後の最後まで監視機構を保っていると推測されるが、老衰などで基本的免疫機構が破綻する際には、乾癬を維持している免疫の過剰な部分も消退すると考える。勉強させられた症例であった。しかし、もっと早くこの患者様と出会い、生物学的製剤を開始したかったと思う。